

平成 15・16 年度科研費研究（代表 野田敏）『生活科で育った学力についての調査研究』掲載  
**子どもの生活科学習への思いについての調査研究 上越編**  
 上越教育大学 木村吉彦

**1．調査対象校の特色～生活科との関わりからみる～**

(1)上越教育大学附属小学校（対象者：小3＝67人・小6＝68人・中3＝64人）

戦後まもなくから「生活学習」と「系統学習」の両立を図る独自のカリキュラムを開発し続けてきた。昭和48年からは、1・2年生に「総合単元」（現「総合単元活動」、現在は3年次まで実施）を導入し、現在の「生活科」の先駆を為す学習活動が30年余にわたって実践されている。（上越教育大学附属小学校『わが校百年の教育史』<2001> pp.22-39.参照。）

(2)上越市立大手町小学校（対象者：小3＝51人・小6＝56人・中3＝49人）

昭和52年から58年にかけて文部省「研究開発学校」の指定を受けた。このとき開発された上越プランのなかで、各学年に「生活活動」が設置された。これに合わせて低学年では、社会科・理科が廃止された。指定解除後も「生活活動」は引き続き実践され、「低学年生活活動」は新設が予想されていた生活科を指向するものとなり、先進的な実践を生み出していった。（前掲『わが校百年の教育史』pp.196-198.参照。）

**2．結果の概要と考察**

**1)生活科の好き・嫌い～年齢による変化～**

生活科に対する「好き・嫌い」の年齢による変化を見たい。「大すき・ややすき」を合わせた割合を小3 小6 中3と年代ごとに追ってみた。他教科（国語・算数・体育・音楽）についての変化も同様のやり方でその割合を追ひ、比較しやすくした。

**1) - 1 上越教育大学附属小学校（附属中学校）**

	生活	国語	算数	音楽	体育
小3	95.6%	80.6%	83.6%	68.6%	95.6%
小6	95.4%	76.5%	73.1%	75.0%	92.6%
中3	90.5%	63.1%	50.8%	75.3%	66.2%

<考察 この変化をどう読みとるか>

もともと「大すき・ややすき」の割合が低い音楽を除いた他教科の落ち込みからすれば、生活科（正確には「総合単元活動」<学校の特色に紹介>）のハイレアベレージの維持は驚異的である。中学校に進学してもその評価がほとんど変わらないことも驚嘆に値する。次の大手町小学校の変化をみてもこの数字の高さは特筆に値すると思われる。

学級カリキュラムにもとづいて学習活動が行われている上越教育大の附属小学校であるが、学校全体として取り組む方針の一致と中学校との連携の成果がこの数字に表れていると思う。

### 1) - 2 上越市立大手町小学校(市立城東中学校)

	生活	国語	算数	音楽	体育
小3	96.1%	70.0%	78.0%	60.0%	86.0%
小6	80.7%	61.5%	61.5%	59.1%	84.2%
中3	59.2%	72.3%	49.9%	55.1%	61.5%

<考察 この変化をどう読みとるか>

落ち込み方は算数と似たパターンであるが、最初の(小3の)数字が極めて高いために、特に中学校での評価の低さが目立つ。小6ではかろうじて8割を維持しているが、体育と同様中学校になると急激に評価を下げていると言える。一般公立校では、よくある話ではないかという他地域からの声も聞こえるが、少なくとも生活科という教科の意味づけについては、「小中連携」が十分になされていないと言わざるを得ない。とりわけ、中3の受験を目前にひかえた時期の調査でもあり、「受験」にかかわらない教科への理解や評価がきわめて低いものであることが見えてくる。

### 2) 生活科の思い出

1)については、地域の特徴というよりも附属学校と一般校との違いが浮き彫りになった結果となってしまった。ここからは、附属小と大手町小の結果を並べて示し、そこから地域の特徴を明らかにしていこう。

#### 2) - 1 生活科学習の中で心に残る活動ベスト4

附属	第1位	第2位	第3位	第4位
小3	15	2	14	16
小6	2	1	14	9
中3	2	15	14	7

- 1 = 学校探検
- 2 = 学区内・地域探検
- 4 = 家族での過ごし方
- 5 = 町探検
- 7 = 公共施設の利用
- 9 = 校庭・学校周辺の散歩による季節の変化
- 14 = 動物飼育
- 15 = 野菜・草花栽培
- 16 = 野菜等を使ったパーティ

大手	第1位	第2位	第3位	第4位
小3	16	15	14	4

小6	15	14	2	9
中3	16	2・5		1・14

<考察>

両校の全学年に挙げられているのは「14 動物飼育」である。附属小学校にも大手町小学校にも、校舎内に飼育小屋があり、中型から大型動物（ヤギ・羊・ロバ・、高学年は牛・豚・馬）が飼育されている。また同時にアヒルやウサギというように複数種類の動物が飼われていることもあった。大手町小学校では、PTAとりわけ父親たちの学校に対する協力体制が確立しており、大がかりな飼育活動を可能にしている。これら施設・設備上の条件の良さと動物飼育の伝統、さらには保護者の協力が動物飼育を充実させている。

附属小学校では、「2 学区内・地域探検」が全学年に出ている。すぐ近くに「高田公園」という広く、魅力的な素材（池・魚・蓮・桜・固定遊具・笹等）にあふれた場所がある。私も何度か子ども達と訪れたが、いつも帰りの遅い子どもがいた。

一方、大手町小学校については、「15・16 植物栽培・調理」とひとまとめにすれば、全学年に「植物栽培」が挙げられていることになる。地域の特性上、祖父母が農家をやっている場合も多く、栽培に関しては協力がもらいやすい条件がある。また、栽培活動そのものが長期にわたってじっくり取り組む活動であるために印象に残っているのではないだろうか。

以上のように、「生活科学習のなかで印象に残った内容」から、上越地域は自然条件に恵まれ、保護者はもちろん地域の方々の協力のもと、子ども達の「生活」が支えられ、充実させてもらっていることが伺える。

2) - 2 生活科学習の中で心に残る活動ワースト3（括弧内は回答数）

附属	第1位	第2位	第3位
小3	18(4)	17(10)	6(15)
小6	18(2)	17(3)	6・8(5)
中3	19(12)	6・17・18(13)	

- 4 = 長期休暇での家族との過ごし方
- 6 = 町の名人との交流
- 8 = バスや電車で出かける
- 17 = 1年間でできるようになったことの発表会
- 18 = 生まれてからの自分の成長
- 19 = 幼稚園・保育園児との異年齢交流

大手	第1位	第2位	第3位
小3	18(3)	8(5)	17(17)
小6	4(5)	18(11)	6・8(12)

中3	18(5)	6(9)	4(10)
----	-------	------	-------

<考察>

両校の全学年に出てくるのは、「18 生まれてからの自分の成長」である。小学校低学年の子どもにとって、生まれてからこれまでの振り返りというのは、容易に「自発的に」行えるものではない。各種調査においても、「振り返り」に対していかに子どもの「主体性」に訴えかけるかが課題となっている。

また、「17 1年間でできるようになったことの発表会」も附属小では全学年、大手町小では1学年に出てくる。少なくとも、附属小学校では、1年間を見通した活動設定なので、とりたてて「できるようになったこと」等の設定はしていない。この二つとも、子ども達は活動として経験していないように思われる。

### 3) 生活科で身に付いた力～子どもたちの自己評価

ここで確認しておくが、付いた力の分類は、次の通りである。

1～3：自然に関する項目，4～7：人や社会に関する項目，8～20：自分自身に関する項目<8～12：学習上の自立に関する項目・13～16：生活上の自立に関する項目・17～20：精神的な自立に関する項目>。

#### 3) - 1 生活科学習の中で身に付いたと思われる力ベスト5

附属	第1位	第2位	第3位	第4位	第5位
小3	6	17	3	1	14
小6	18	17	16	1	4
中3	1	6	7	8	3

大手	第1位	第2位	第3位	第4位	第5位
小3	1	7	13	4	18
小6	1	7	18	4・6・7	
中3	1	5	3	13	7

1 = 動・植物を育て生き物に親しむことができるようになった。

3 = 身の回りの自然を大切にするようになった。

4 = 自分の学校が好きになった。

- 5 = 自分の住んでいる町や人に関心をもてるようになった。
- 6 = 公共施設や公共交通機関の正しい利用
- 7 = 人に直接話したり、手紙や電話で用件を伝えることができる。
- 8 = 感じたことや気付いたことを自分で考えた方法で伝えられるようになった。
- 1 3 = 自分を育ててくれた人やお世話になった人への感謝の気持ちをもてる。
- 1 4 = 健康への配慮や挨拶など生活に必要な習慣が身に付いた。
- 1 6 = 学習したことを生活の中で使えるようになった。
- 1 7 = 自分の得意なことや友達のよいところに気付けるようになった。
- 1 8 = できないことに挑戦したり、少しの失敗にくじけず、ねばり強く努力できるようになった。

<考察>

両校の全学年に挙がっているのは、「1 動植物に親しむことができる」である。印象に残った活動の結果と一致するので順当であろう。大手町小学校の全学年と附属小の中3には「7」が出てくる。内容としては「8」とも共通した部分がある。あえて違いを意識して命名すれば、7 = 伝達力・8 = 表現力とでも言えようか。二つあわせて「伝達・表現力」としても良いと思われるが、大手町小学校は商店街に接しており、伝統的に町探検に力を入れている。その結果として他者に直接話しかけたり、用件をはっきり伝えたりする力が育っていると思われる。

附属小学校で小3・小6と中3とで大きな違いが見られる。それは、中3に対して、小3・6では、自分自身の自立に関する力が多いということである。中3において自分自身に関わる項目は唯一「8 表現力」である。ここには、生活科10年の歴史と附属小学校内での「育てたい力」の変遷が反映していると考えられる。

大手町小学校の場合、自分自身に関する自立の項目が時を経ても出てくるということは、この間の大手町小学校の生活科が、(附属と比べて、ということになるが)比較的安定した内容で推移したことを意味するのではないだろうか。

3) - 2 生活科学習の中で身に付いたと思われる力ワースト3 (括弧内は回答数)

附属	第1位	第2位	第3位
小3	すべての力に37件以上の回答 (ワーストの意味なしと判断)		
小6	5(12)	2(14)	8・11 (25)
中3	2(17)	4(20)	19(21)

大手	第1位	第2位	第3位

小3	1 5 ( 1 7 )	2 ( 2 2 )	5 ( 2 6 )
小6	1 1 ( 1 2 )	2 ( 1 3 )	9 ( 1 5 )
中3	1 9 ( 1 0 )	9 ( 1 1 )	1 5 ・ 1 6 ・ 1 7 ( 1 4 )

2 = 自分の生活の中に季節を取り入れることができる。

4 = 自分の学校が好きになった。

5 = 自分の住んでいる町や人に関心をもてるようになった。

8 = 感じたことや気付いたことを自分で考えた方法で伝えられるようになった。

9 = 自分なりの考えを大切にしておかを作りに出していこうとすることができる。

1 1 = 自分で学習するおもしろさを知った。

1 5 = 身近な道具を使うなど、生活上大切な技能が身に付いた。

1 6 = 学習したことを生活の中で使えるようになった。

1 7 = 自分の得意なことや友達のよいところに気付けるようになった。

1 9 = 自信を持って生活できるようになった。

#### <考察>

附属小の場合、3年生にはまだ「総合単元活動」が行われており様々な活動が現在進行中である。また低年齢特有の自己評価の高さからいずれの力も「付いた」と考える子どもが多かったのであろう。小6・中3に共通しているのは「2 季節の取り入れ」である。子どもにとって「季節」とは抽象的なものかもしれない。また、正月等を取り立てて扱う活動はやっていなかったかもしれない。

大手町小の場合、前年度の活動なだけに、小3の数値の高さが気になる。3学年すべてに出てくる項目はない。2学年に出てくるのが「2」「9」「15」である。「2」の季節の生活への取り入れは附属と共通である。「9」が小6・中3に、「2」が小3・6に出てくる。各学年バラバラの結果と読みとれるが、特に中3において、すべて「自分自身の自立」に関する項目であることが気になる。

#### 4) 自由記述から～高校3年生世代の意見

ここで、これまで考察対象から除いていた高校3年生の意見に注目しよう。平成16年度の高校3年生とは、そのほとんどが平成4年度小学校入学者である。つまり生活科を2年間経験した初めての子ども達である。彼ら・彼女らにとってはもう10年以上前の出来事であるが、それでもまじめにアンケートに回答し、自由記述まで記入してくれた熱心さには心から敬意を表したい。この生活科第1世代の子ども達の声に耳を傾けることでこの10数年の生活科の存在意義と歩みを確かめたい。

実際の回答から出身小学校を特定することは容易ではなく、上越地域出身であるとはっきりしているのは、7名のみである。ここにすべて転記する。

- ・小学生のうちにきちんと社会のマナーを身につけるべきであると思う。自然とふれあうことは、とても大切なことであると思うし、それによって心にゆとりのある大人に育っていくと思う。生活科にばかり、力を入れるというのは少し問題はあると思うが、

- 自分が生活している場所や環境に関心を持つことは良いと思う。( 附属小学校出身 )
- ・植物の植え方などを学んだことで花に関心を持つようになった。( 附属小学校出身 )
  - ・とにかく楽しかった。学年があがるにつれて授業数が減ったので悲しかった。( 附属小学校出身 )
  - ・大手町小では、生活活動が6年生までであったので、長い期間をかけて時には舞台上で演技をすることがあり、なかなか大きくなるとできないようなことができたので、とても大きな影響を受けた。大変いい活動だったと思うので、これからもずっと続けてください。( 大手町小学校出身 )
  - ・1・2年の時だけでなく、週に1回でいいから長く続けた方が良いと思います。その時だけだと、忘れてしまいます。長くやっていると自然に身につきます。( 大手町小学校出身 )
  - ・自分で計画を立て、実行するという習慣がつかえました。レポート作りなども得意になったと思います。( 大手町小学校出身 )
  - ・人が生きていく上で大切なことをたくさん学べると思う。たくさん続けていいと思う。( 大手町小学校出身 )

#### <考察>

アンケートに回答を寄せること自体が自由意志に基づき、かつ自由記述欄にわざわざ記述してくれているということは、基本的に「生活科肯定」派であると思うが、それぞれにいい着眼をもって書いてくれている。

「自分が生活している場所や環境に関心を持つことは良いこと」「とにかく楽しかった」「なかなか大きくなるとできないようなことができた」「週に1回でいいから長く続けた方が良い」「自分で計画を立て、実行するという習慣がついた」「人が生きていく上で大切なことをたくさん学べる」

どれもこれも生活科の本質を突いた意見である。生活科並びにその後の学校教育の中でこの子ども達は、確実に「生活すること」「生きること」を学んだのではないだろうか。

### 3 . 総括

はじめの「好き・嫌い」の結果からも明らかのように、実を言うと、必ずしも生活科に対して肯定的・好意的な意見ばかりではなかった。しかしながら、今回のこの報告は、私たちがめざしている「よりよき生活者の育成」という生活科の所期の目的がどれだけ達成されているか、また、どれだけ近づいているか、さらには、具体的にはどのような育ちの姿として読みとれるかを確かめようとするものであった。その意味で、数値的な結果については、謙虚に受け止めるしかないが、自由記述については、すべての自由記述を代表して高校生のものだけを取り上げた。2-4)の考察に記したように、意見を寄せてくれた高校生達は、生活科の2年間を土台にし、その後10年間をかけて着実に育ってくれていると私は思う。子どもの生活を大事にし、子どもの日常生活の中で課題発見と課題解決の力を育もうとしてきた上越地域の「生活教育」の伝統が、子ども達の回答(批判的なものも含め)から読みとれる。今回のアンケート調査によって、そのような「育ちの姿」が確認されたことが何よりの成果ではないだろうか。